

生活史研究によるパーソナリティ研究の試み(1)

本田 時 雄

An Approach to Personality with the Analysis of Life History

Tokio Honda

The man lives in the four dimensions of time and space. It is supposed that the man has four sides; 1) physiological and biological, 2) psychological, 3) sociological and 4) spiritual and existential (Fig. I-1). Such a man is living in his environments of home, school, community, occupation and culture which change with the time (Fig. I-2).

In Fig. 3 is showed the relationship between the changes of the time and the history of the man (it may be named "life history"). The life history of a man contains not only his past but also his future. The life history (or life cycle) of the woman changes remarkably in recent 40 years (Fig. I-4).

From the point of view above, this article aims to study the effects of the time toward the personality development by analyzing the life history of women.

Remarkable results are as follows;

1. Opinions unaccompanied with actual and deep feelings are changed with the time, but ones based on the real experiences are not easily changed.
2. The former belongs to the ideal and personal area, and the latter belongs to the area that is socially affected.

はじめに

われわれ人間は空間と時間の4次元に生きる生活体である。その生活の中で、われわれは学び、働き、家族をつくり、社会を構成し、その営みを通して、人間の生命は燃焼する。その際、同一個人でも環境が異なれば行動は異なり、また同一環境下でも人がかかわれば行動は異なる(ここでの環境は客観的なもので

なく、人の中に反映された主観的、心理的なものであることは論をまたない)。このように考えることは主体と環境との「相互作用説」であり、先ず両者の特性が明らかにされなければならない。

主体である人間に関する理論は古来枚挙に暇ないが、ここでは次のように考える。

人間の基本的側面として、図 I・1 に示したように、①生理・生物学的(身体的)側面、②

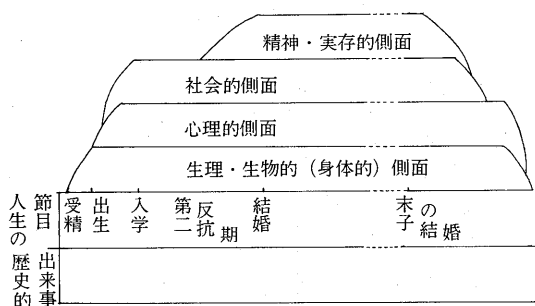


図 I・1 人間存在の4側面の模式図

心理的側面、③社会的側面および④精神・実存的側面の4つの側面が考えられる。すなわち精子と卵子の結合による受精によって生理・生物的存在となり、誕生の前後に心理的側面および社会的側面が現われる。さらに第2反抗期を通じて人生観、世界観を自覚的に模索するようになって、精神・実存的側面が加わる。人生の終りに近づくにつれて、一般に精神・実存的側面から消失していき、生理・生物的存在が消滅して死となる（詳しくは、本田・野島『現代社会の人間形成』福村出版

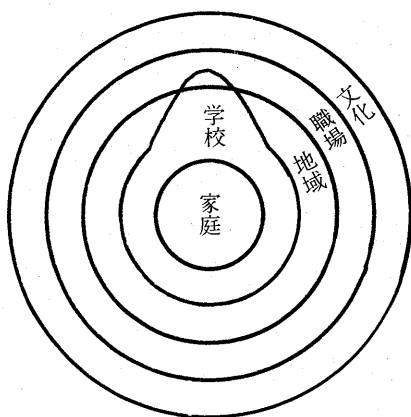


図 I・2 生活空間の模式図

を参照されたい)。この4つの側面が相互に絡みあって人間の一生を構築している。そして就職や結婚などの人生の重大な「節目」において、4つの側面は緊密に協同するが、病いに倒れた時は身体的側面が、受験では心理

的側面が、また「人生とは？」と考える時は精神・実存的側面が前面に強く現われる。その時間的経過は心理学などでは発達段階とし、また社会学ではライフステージとかライフサイクルとか呼ばれている。

空間的広がりについては、社会学で多く研究されているが、ここでは青井忠夫（1974）を参考にして、家庭を中心として地域、学校、職場および文化の5つの領域に大別した（図 I・2）。前記したように、これらが環境として主体に影響するが、この他に主体に直接または環境を通して間接的に影響をおよぼすものとして「時代」が挙げられよう。「時代」によるライフサイクルの変化の一例を図 I・3 に示した。それは純粹に時代との関連で人生の「節目」を眺めたものであるが、さらに「時代」を時間だけでなく、社会の変遷という意味で考えると図 I・4 のようになる。いずれにせよ、「時代」という要因が人間の一生に大きく関与していることが明らかである。そしてこの点を重視したものがコホート分析（cohort analysis）である。コホートとは同時出生集団のことで、コホート分析とは、幾つかのコホートを時間的推移にしたがって追跡し、分析する方法である。これは、従来対立していた横断的研究法と縦断的研究法とを統合し、発達におよぼす要因をそれぞれ独立に抽出しようとするものである。その1つがシャイエ（Schaie, K. W. 1965）の3要因モデルであり、それを表 I・1 に示してある。

これは、最低2回以上の調査・測定が必要であるが、回想および予想を用いれば、調査、測定の回数を節約することができ、同時に個人の時間的推移をも測定可能となる。また、Schaie, K. W. が測度として用いた「年令」は、人生の「節目」を加味したものと考えた方がよい。何故なら発達には個人差があり、年令によって一律に人生を考えることは、特に個人差の大きい青年期において無理がある。この観点からの研究の一例として川浦他（19

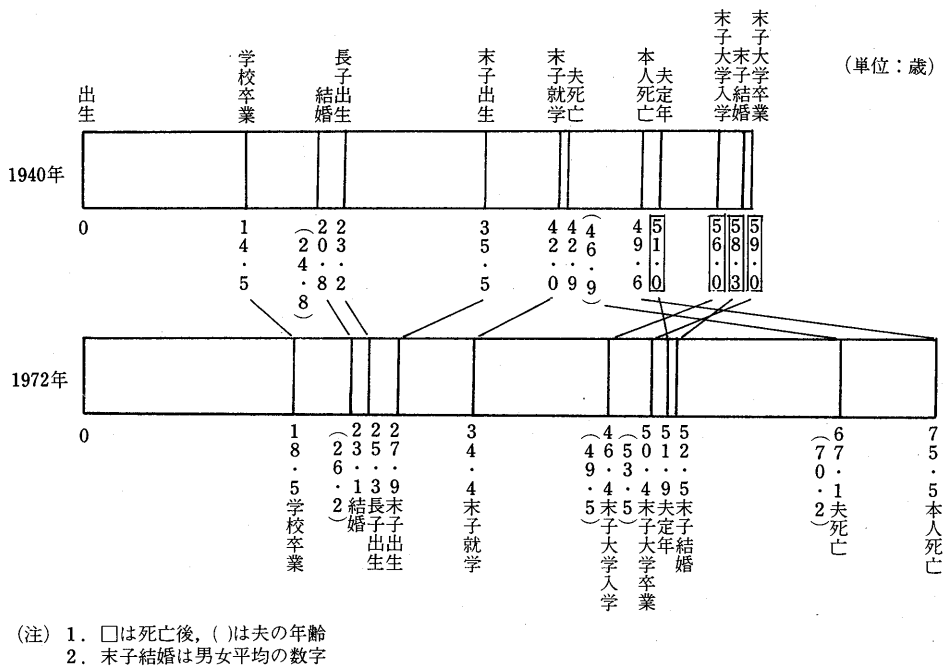


図 I・3 女性のライフサイクル

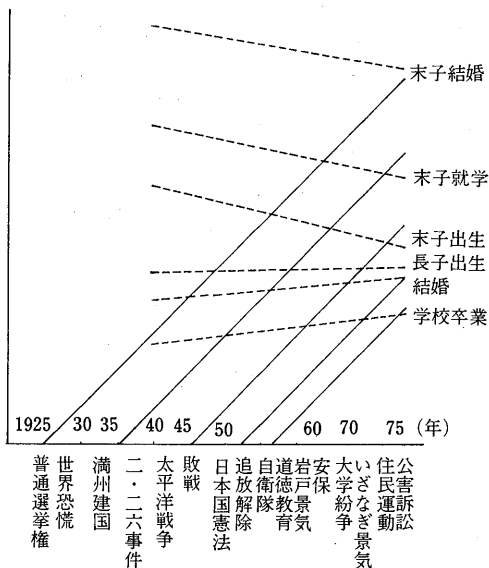


図 I・4

67) がある。それは「結婚相手の条件」を表 I・2のように世代ごとに分析したものである。性格は、どの世代でも結婚前に第1位に挙

げられており、時代に関係ない。しかし健康は S_2 までの世代では第2位に選ばれているが、それ以後の世代では4位になっており、また将来性は T と S_1 で3位になっているが、 S_2 でもっと具体的な経済力によって代られ、それ以後では5位以下になり、さらに「気があう」が S_2 以後の世代で上位に選ばれている。これらの変化は時代と関係があると考えられる。とくに若い世代で、将来性、経済力が消え、「気が合う」人生観などの個人的条件が上位に挙げられたことは、時代の閉塞性、刹那主義、高度経済成長の時代に青年期を過したことを考えると納得できよう。

以上のように、生活は主体側の出生・成長・成熟・老衰・死亡だけでなく環境においても時間の要因は深く関係している。しかもそれは過去にひきずられるのみならず、未来によっても規定されている。したがって生活の営みは、時間軸を過去だけに限定した「生活

表Ⅰ・Ⅰ コホート分析

コホート	コホートA	コホートB	コホートC
出生年	1955年生	1960年生	1965年生
測定時	1965年生	1965年生	1965年生
年	歳	歳	歳
1965	10	5	0
1966	11	6	1
1967	12	7	2
1968	13	8	3
1969	14	9	4
1970	15	10	5
1971	16	11	6
1972	17	12	7
1973	18	13	8
1974	19	14	9
1975	20	15	10

cohort sequential time-sequential cross-sequential
Shaie's tri-factor model

歴」(生育歴)でなく、未来をも展望する「生活史」と呼びたい。ちなみに近年広く使用されており、生活史と類似した概念であるライフサイクルとの関係は、森岡清美(1979)を参考にすると次のようである。①両者とも過去一現在一未来志向的である点は類似している。②ライフサイクルはあるカテゴリーの個別事例に共通するものを求めるという意味で一般的であるのに対して、生活史は個別性にも関心がある。③ライフサイクルは家族を中心におき、個人のそれも家族のそれと表裏一体をなしているが、生活史はもっぱら個人に注目する。

さてここで、本研究で“女性”を取り上げ

表Ⅰ・Ⅱ 結婚相手の条件の推移

	1920	'30	'40	'50	'60	'70 ('75)
(出生年代)						調査時点
T 大正生まれ (1911-25) N=28		性 格 50% 健 康 17% 将来性 17%	性 格 45% 健 康 30% 経済力 10%			健 康 48% 性 格 29% 経済力 10% 気があう10%
S1 昭和1桁生まれ (1926-34) N=72		性 格 37% 健 康 23% 将来性 10%	健 康 35% 性 格 27% 経済力 12% 気があう12%			健 康 31% 性 格 27% 経済力 14% 気があう 9% 人生観 9%
S2 ₁ 昭和2桁生まれ (1935-45) N=60			性 格 47% 健 康 14% 経済力 12% 気があう12%	性 格 42% 健 康 19% 経済力 11% 気があう11%		性 格 27% 健 康 25% 経済力 17% 人生観 17% 気があう10%
S2 ₂ 昭和2桁生まれ (1946-54) N=74		結婚前 結婚時 理 想	の条件 (1位のみ)	*性 格 40% 気があう25% 人生観 10% 健 康 9%	性 格 57% 健 康 7% 気があう 7% 人生観 7% 同・別居 7%	*性 格 36% 気があう26% 健 康 11% 人生観 11%
S3 (1946-56) N=136						

(T-S2₂; 既婚者, S3; 未婚者)

*S2₂, S3 の合計 (この欄のみ)

た理由を述べよう。男性が数十年間、職住の遠近を問わなければ数百年間生活費を稼ぐためにあくせくと働くという現象は変わっていない。それに対して女性の場合、結婚出産などという「節目」が多く、また時代の波をものにかぶって、ある時は、「家庭へ」、またある時は「職場へ」と追いたてられてきた。特に戦

後の新しい憲法、民法およびその他の法律や制度による変革は政治をはじめ経済、教育など広い分野にわたって女性の生き方にきわめて大きな影響をおよぼした。そしてその影響した諸々の要因を一括して名づけるならば、「時代」ということになるだろう。

本研究では女性の生活史におよぼす「時代」

の影響を5世代にわたって分析・検討しようとした。

Ⅱ 方 法

1 調査票

女性の場合、加齢に伴ってウェイトのかかる生活領域が異なるが、これまでの研究(本田1975, 田代ら1975, 本田ら1976)を参考にし、①被養育(どんなしつけを受けたか), ②被教育(学校教育の期間, 学歴), ③職業(就業の有無, その理由), ④恋愛・結婚(恋愛・性・結婚の関係, 結婚決心の理由, 性の意味, 夫の評価, 母親の評価と自己の評価), ⑤家事(家事の位置づけ, 夫の協力), ⑥育児(子ども観), ⑦子どもの教育(しつけ, 期待するキャリア・パターン), ⑧余暇活動(趣味, 友人), ⑨社会的活動(公害問題)などを含むB5判, 12ページのものである。

2. 被調査者

回想および将来に対する予想・希望を含む質問があるため, 下限は18才, 上限は記憶力の確かな何歳でも良かったが, 本調査では, 19歳~60歳の女性, 計 320名であった。その群分けは表Ⅱ・1のように, 本報告では時代変化, 教育体制を中心とした「世代」によって行なった。

なお, 本報告の分析では用いていないが,

表Ⅱ・1 被調査者群

生 年	時代, 教育体制を中心とした各世代の特徴と略称	人 数	
		既婚	未婚
1919(大9) ~1925(大14)	旧教育世代 大正生れ	18	0
1926(昭1) ~1934(昭9)	旧教育から新教育への移行世代 昭和1桁	60	0
1935(昭10) ~1945(昭20)	新教育世代 昭和2桁前	90	3
1946(昭21) ~1952(昭27)	“戦後っ子” 戦後世代	65	4
1953(昭28) ~1960(昭35)	戦争を知らない世代 戦無世代	5	75

被調査者の中には親子のペアが49組あった。

3. 調査の方法

調査の方法は多数あるが, 本調査では留置法および郵送法を主として用いた。回収率約63%であった。

4. データ整理の方法

データは, まず世代別に分け, 次いで調査項目ごとに集計し, パーセントを算出した。なお, 母親, 父親および自己に対する評定は平均値を算出した。

Ⅲ 結果および考察

1. 生活水準意識: いずれの世代も「中」がきわめて多く, (50~71%), 従来新聞などで報道されてきたものと一致した傾向を示していた。次いで「中の下」が「中の上」よりもやや多く選ばれていた。世代の特徴については, 大正生れと昭和1桁生れが「下」で皆無で, 「上」でわずかにおり類似しているが, 大正生れの方が「中の下」が39%と多かった。昭和2桁生れは, 「上」「下」がなく, 「中」に最も集中していた。戦後世代は「下」が1%おり, 前の世代より上下にやや広がっていた。戦無世代は上下にもっと広がっているが, 「中の上」が「中の下」よりも多い唯一の世代であった。

表Ⅲ・1 生活水準意識

[数字は%, ()は実数]

	1919 ~1925	1926 ~1934	1935 ~1945	1946 ~1952	1953 ~1960
上	7 (1)	2 (1)	—	—	1 (1)
中の上	7 (1)	17 (1)	11 (10)	14 (10)	18 (14)
中	50 (9)	60 (36)	71 (66)	64 (44)	61 (49)
中の下	39 (7)	20 (12)	14 (13)	19 (13)	15 (12)
下	—	—	—	1 (1)	3 (2)
DK, NA	—	(1)	(4)	(1)	(2)

2. 両親からの性差のあるしつけ: 性差のあるしつけを父親から受けたと回答した者はいずれの世代でも半数以下で, しかも戦後世代まで若くなるにつれて, その割合は減少し

ていた。これに対し母親からは戦後世代が39%であった以外、他の世代では半数以上受けたと述べていた。すなわち性差のあるしつけを父親からも母親からも受けたと答えた者は戦後世代で最少になり、戦無世代で再び増加していた。以上のことは、娘に「女らしさ」をしつけるのは主として母親であり、性差のあるしつけ、ひいては「女らしさ」の内容が時代によって異なることを示唆している。確かに戦後世代は戦後の混乱期に生れたので、しつけそのものをあまり受けなかったかもしれない。しかしそれは絶対量であり、相対的にはやはり「性差のあるしつけ」が少なかったのであろう。何故ならその時代は、戦後「民主主義」がはなやかな時期であり、男女同権、男女平等の声が一般に広まった時代であるからだろう。その後、高度経済成長、保守化の時代には「女らしさ」が求められ、その時期に生れた世代に性差のあるしつけが与えられることが増加したと見てよからう。

表Ⅲ・2 両親からの性差あるしつけ

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
母 a 受けた	56 (10)	77 (46)	56 (52)	39 (27)	69 (55)
か b 受けなかった	39 (7)	22 (13)	38 (36)	57 (39)	31 (25)
ら DK, NA	(1)	(1)	(5)	(3)	—
父 a 受けた	50 (9)	47 (28)	41 (38)	36 (25)	45 (36)
か b 受けない	39 (7)	38 (23)	43 (40)	58 (40)	51 (41)
ら DK, NA	(2)	(9)	(15)	(4)	(3)

3. 学校生活で得たもの：「人間としての素養・教養を身につけた」は、戦無世代 (24%) 以外の世代で第1位に挙げられており、しかも世代が若くなるにつれて減少していた。この傾向は「生きて働く知識や技術を学んだ」という項目にもみられた。逆に「かけがえのない友人を得た」は世代が若くなるほど選ばれた割合が増加し、大正生れが皆無なのに対して、戦無世代では33%で第1位であった。同様の傾向は「知的好奇心が培われた」という項目にも認められた。

以上のような傾向は、学校教育の変遷と対応する。昔の学校教育は知育が中心であり、学校へ行く者も知識を求めたが、最近では、学校へ行くのは知識を求めてではなく、「行かなければならないから」「楽しさ」を求めて行き、学校側もそれを黙認している。「とりたてて何もない」が各世代10%前後もいたことは教育に携わる者として胆に深く銘じなければならない。

表Ⅲ・3 学校生活で得たもの

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 生きて働く知識や技術を学んだ	33 (6)	17 (10)	16 (15)	14 (10)	9 (7)
b. 人間としての素養・教養を身につけた	50 (9)	43 (26)	42 (39)	32 (22)	24 (19)
c. 知的好奇心が培われた	—	2 (1)	2 (2)	7 (5)	11 (9)
d. 教師の人間性、生き方にふれた	—	8 (5)	5 (5)	6 (4)	5 (1)
e. かけがえのない友人を得た	—	8 (5)	12 (11)	22 (15)	33 (26)
f. クラブ・サークル活動で興味・関心をのばせた	—	3 (2)	3 (3)	9 (6)	8 (6)
g. その他	—	2 (1)	—	—	6 (5)
h. とりたてて何も得なかった	11 (2)	17 (10)	11 (10)	10 (7)	6 (5)
DK, NA	(1)	—	(8)	—	(2)

4. 仕事につく理由：①最初の就職——

「自分の能力・技術を生かしたい」という項目を戦無世代は36%も選んでおり、世代が若いほどこの項目を多く選んでいた。逆の傾向を示したのが「夫と共に働くのが当然で、経済的自立が必要だと思って」であり、大正生れが22%，戦後、戦無世代は1%であった。

「自分の能力……」の項目が純粹に個人的であるのに対して「夫と共に……」は夫との関係の中での観点であるとする、若い世代ほど自己中心的でシラケていると考えられる。そう考えると「社会とのつながりを持ち、広い視野を持つ機会だから」という項目を多く選んでいる戦後世代や戦無世代が就職の際に示す態度もかなり納得できよう。

②将来の就職——戦無世代は前項と同様、「自分の能力……」が最も多かったが、戦後

世代から昭和1 桁生れまでは経済的理由を多く選ぶようになった。大正生れは逆に経済的理由から「自分の能力……」や社会的広がりも多く求めるようになっていた。

表Ⅲ・4 仕事につく理由
(左/最初の就職 右/将来の就職)

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 家計が苦しく働かなければならない	11(2) —	7(4) 2(1)	6(6) 1(1)	7(5) 1(1)	3(2) —
b. 家計はそれほど苦しくないが、経済的ゆとりがない	— 6(1)	2(1) 5(3)	9(8) 6(6)	10(7) 16(11)	4(3) 6(5)
c. ある目的(教養費、建築資金など)のため	6(1) —	5(3) 12(7)	2(2) 19(10)	3(2) 10(7)	4(3) 10(8)
d. 夫と共に稼ぐのが当然で経済的自立が必要と思つて	22(4) 11(2)	5(3) 7(4)	4(4) 6(6)	1(1) 4(3)	1(1) 3(2)
e. 自分の家の仕事(家業)なので	6(1) 11(2)	7(4) 5(3)	12(1) 6(6)	6(4) 6(4)	3(2) —
f. 自分の能力・技術を生かしたい	6(1) 17(3)	5(3) 7(4)	13(2) 11(10)	16(11) 4(10)	36(29) 9(23)
g. 社会とのつながりを持ち広い視野を持つ機会だから	— 1(3)	3(2) 3(2)	2(2) 13(12)	10(7) 4(10)	9(7) 16(13)
h. このまま家庭に閉居してしまうのはつまらない	11(2) 7(3)	2(1) 12(7)	3(3) 8(7)	(1) 6(4)	3(2) 14(11)
DK, NA	(7) (4)	39 (29)	45 (27)	31 (19)	31 (18)

5. 恋愛・性・結婚: 恋愛が結婚に結びつくという考え方が全般にきわめて多く、どの世代でも60%以上であった。これは現代の結婚の過半数が恋愛によるものであることと対応する。その際の性関係の有無に関しては昭和1 桁生れが境い目で、それ以前は「無」が多いが、それ以後はほぼ半数であった。時代の推移がよく表われているものは「性関係のない恋愛によって結婚する」というもので、

表Ⅲ・5 恋愛・性・結婚

恋愛

性関係を伴う

結婚と結びつく a

結婚と結びつかない b

性関係を伴わない

結婚と結びつく c

結婚と結びつかない d

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a	22 (4)	18 (11)	37 (29)	36 (25)	35 (28)
b	0 (1)	3 (2)	6 (6)	17 (12)	14 (11)
c	50 (9)	48 (29)	37 (34)	28 (19)	28 (22)
d	17 (3)	25 (15)	14 (13)	14 (10)	20 (16)
DK, NA	(1)	(3)	(6)	(3)	(3)

世代が若くなるにつれて減少するという傾向が認められる。また「性関係のある恋愛をしても結婚に結びつかない」と考える者が各世代3 %以上おり、特に戦後、戦無世代15%前後もいた。

6 結婚を決心する(した)理由: 全ての世代で「好意を感じる人が現われたから」がとび抜けて多く、しかも大正生れ(33%)を除けば、世代が若くなるほど増加していた。逆の傾向を示したのは、「まわりが決めた」適令期に関する項目であった。つまり見合い婚が多かった以前には外的な理由によって多く結婚が決心されたが、恋愛婚が主流になるにつれて内的・個人的理由によって結婚する人びとが多くなったことであろう。このことは「結婚相手に望む条件」に関する川浦らの報告(1976)にも認められる。彼らの研究結果によれば、世代が若くなるにつれて将来性、経済力などの外的条件は減少し、逆に「気があう」「人生観」などの内的条件が重視される傾向があるという。

また「仕事にあきたから」はいずれの世代も一人も選んでおらず、結婚を逃げ道と考える人はいない。しかし「何となく」結婚する(した人)が数%ではあるが、大正生れ以外の各世代にいた。

表Ⅲ・6 結婚決心の理由(一位のみ)

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 適令期になったから	6 (1)	25 (15)	19 (18)	16 (11)	5 (4)
b. 適令期をすぎたから	—	7 (4)	3 (3)	7 (5)	3 (2)
c. 好意を感じる人が現われたから	33 (6)	25 (15)	41 (38)	51 (35)	75 (60)
d. 子どもができたから	—	—	—	1 (1)	1 (1)
e. 子どもを産み育てたかったから	—	—	—	1 (1)	4 (3)
f. 仕事にあきたから	—	—	—	—	—
g. 自分の意志よりも親やまわりが決めたから	17 (3)	13 (8)	6 (6)	6 (4)	—
h. 何となく	—	2 (1)	2 (2)	3 (2)	1 (1)
g. その他	11 (2)	3 (2)	2 (2)	3 (2)	5 (4)
DK, NA	(6)	(15)	(24)	(8)	(5)

7. 結婚式・披露宴の意味: 「人生の1つのけじめ」と考える人が大正生れ(17%)以外の世代で30~50%おり、大正生れは「2人

の間の誓約として」を最も多く選んでおり、40%であった。また「社会的承認を得る」が各世代とも20%台で、時代による変化は認められなかった。「身近な人々への報告」は5～15%であり多くないが、世代が若くなるにつれて増加していた。結婚式・披露宴を「無意味である」とする人も昭和1桁生れおよび戦無世代に数%いた。

表Ⅲ・7 結婚式・披露宴の意味（一位のみ）

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 両親を満足させる	12 (2)	12 (7)	3 (3)	12 (8)	14 (11)
b. 社会的承認を得る	28 (5)	20 (12)	22 (20)	29 (20)	24 (19)
c. 2人の間の誓約として	40 (7)	13 (8)	12 (11)	10 (7)	13 (10)
d. 人生の1つのけじめとして	17 (3)	47 (20)	54 (50)	38 (26)	30 (24)
e. 身近な人々への報告として	—	5 (3)	6 (6)	10 (7)	15 (12)
f. その他	6 (1)	—	—	—	—
g. 無意味である	—	3 (2)	—	—	5 (4)
DK, NA	—	—	(3)	(1)	(—)

8. 結婚後の親からの援助：「心苦しいがやむを得ない場合もある」が各世代とも最も多く（50%前後）選ばれており、昭和世代では若いほどこの項目を選ぶ割合が増えていた。次いで前記項目と相反する項目「絶対に受けたくない」が戦後世代（9%）以外、いずれの世代でも20%前後だった。「親の義務」と考える人はどの世代でも皆無であったが、「くれるものはもらっておく」は大正生れが6%で最少で、最も多かったのは戦後世代の19%であった。

表Ⅲ・8 結婚後の親からの援助

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 心苦しいがやむを得ないばあいもある	50 (9)	45 (27)	52 (48)	54 (37)	58 (46)
b. 苦しいときは、お互いさまである	17 (3)	10 (6)	11 (10)	13 (9)	9 (7)
c. くれるものはもらっておく	6 (1)	12 (7)	9 (8)	19 (13)	9 (7)
d. 親の義務の一部だと思う	—	—	—	—	—
e. 絶対に援助をうけたくない	22 (4)	25 (15)	25 (22)	9 (6)	18 (14)
f. その他	—	5 (3)	0 (1)	4 (3)	4 (3)
DK, NA	(1)	(2)	(3)	(1)	(3)

9. 結婚生活における夫との性生活：「漠然と考えていただけ（考えているだけ）」がいずれの世代でも30%台で、世代間にほとんど差が認められなかった。「あまり考えたことがなかった（ない）」は大正生れが45%，戦無世代が29%で、他の世代がいずれも30%台であった。以上の2項目が全体の65%以上を占め、「知識を得ようと努めた（努める）」が10%前後であることは、性に対する関心、積極性の欠如を物語っているのか、または女性雑誌における性知識の氾濫を考えるならば「セックス・タブー」の存在を示唆しているかであろう。

表Ⅲ・9 結婚生活における夫との性生活

（複数回答）

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. あまり考えたことがなかった（ない）	33 (10)	45 (41)	39 (53)	37 (34)	29 (30)
b. 知識を得ようと努めた（努める）	13 (4)	8 (7)	6 (8)	10 (9)	7 (7)
c. 非常に不安だった（不安である）	7 (2)	12 (11)	14 (19)	13 (12)	19 (20)
d. 期待を持っていた（いる）	10 (3)	4 (4)	1 (2)	6 (6)	5 (5)
e. 漠然と考えていただけ（いるだけ）	33 (10)	30 (28)	36 (48)	34 (32)	38 (40)
DK, NA	(1)	(1)	(5)	—	(3)

10. 結婚生活における性：①結婚前——「性生活のあり方の中に夫や妻の愛情が反映される」は大正生れ（0%）から戦無世代（36%）というように世代が若くなるにつれて増加していた。「性生活が欠けても結婚生活は成り立つ」は大正生れが11%で、他は25%前後であった。前記2項目と対照的な項目は「結婚生活に性が伴うのは当然」であるが、これを大正生れは44%も選び、他の世代はいずれも20%強であった。以上のことは性と愛情との関係が時代と共に変化し、結婚生活における性に対する意見・態度が多様化してきたことを示している。

「性は子どもを作るため」は、大正生れの青春は「産めよ、殖せよ」の戦時下であったにも拘らず、一人も選んでおらず、他の世代が5～13%も選んでいた。「性は結婚生活の

悩みの種である」「性は結婚生活を楽しくする」はいずれもわずかしか選ばれなかった。

⑥結婚後（未婚者が大多数である戦無世代は除く）——「性生活のあり方の中に……」が結婚前の2倍以上も選ばれ、しかも前述のように若いほど多く回答していた。これと逆の傾向は「結婚生活に性が伴う……」に見られ、大正生れの50%から戦後世代の17%へと減少していた。

「性は子ども……」は結婚前と比べると1/10に減少し、「性は結婚生活を楽しくする」は6倍に増加した。「性生活が欠けても……」や「性は悩みの種」はほとんど変化が見られなかった。

以上、結婚前後を比較してみると、実際に結婚することによって性の位置づけが望ましい方向に促進されていると言えよう。

表Ⅲ・10 結婚生活における性
(左/結婚前 右/結婚後)

	1919 ~1925	1926 ~1934	1935 ~1945	1946 ~1952	1953 ~1960
a. 性生活が欠けても結婚生活は成り立つ	11(2)11(2)	28(17)31(4)	23(21)24(2)	25(17)61(1)	28(2)3(2)
b. 性生活のあり方の中に夫や妻の愛情が反映される	-22(4)	7(4)13(18)	18(17)33(1)	30(21)46(3)	36(29)5(4)
c. 性は子どもを作るためのもの	-6(1)	13(8)	-5(5)	-10(7)1(1)	9(6)1(1)
d. 結婚生活には性が伴うのが当然である	44(8)50(9)	23(14)33(20)	23(21)33(1)	22(19)17(12)	24(19)3(2)
e. 性は結婚生活の悩みの種である	6(1)	-2(1)3(2)	-	1(1)	-
f. 性は結婚生活を楽しくする	-6(1)	-5(3)	2(2)4(4)	-6(4)	-
g. その他	-	-	-	3(2)	1(1)
DK, NA	(7) (1)	(0) (3)	(2) (5)	(6) (9)	(3) (7)

11. 夫以外の男友だち：「夫が知っているつき合いならよい」は大正生れ22%，戦無世代65%と、世代が若くなるにつれて増加し、「グループでのつき合いならよい」は逆の傾向を示していた。これは、「男女七歳にして席を同じうせず」という教育を受け、一対一の男女関係を暗いイメージでしかとられることができない大正生れと、幼ない時から男女共学で育ち、ニュー・ファミリー、友愛結婚などに代表される男女関係を考える若い世代との差を示しており、時代の影響の大きいこ

とを示している。

「責任をもつなら自由である」は各世代とも10%台で、また「よいことではない」は大正生れ（6%）と戦無世代（8%）の間の3世代が25%前後で選んでいた。

表Ⅲ・11 夫以外の男友だち

	1919 ~1925	1926 ~1934	1935 ~1945	1946 ~1952	1953 ~1960
a. 夫が知っているつき合いならよい	22 (4)	30 (18)	38 (31)	45 (31)	65 (52)
b. グループでのつき合いならよい	39 (7)	20 (14)	14 (13)	13 (9)	8 (6)
c. 2人だけでも、お茶をのむていどならよい	-	5 (3)	6 (6)	4 (3)	4 (3)
d. 責任をもつなら自由でよい	17 (3)	15 (9)	12 (10)	14 (10)	15 (12)
e. よいことではない	6 (1)	27 (6)	27 (25)	22 (15)	8 (6)
f. その他	6 (1)	-	(1)	(1)	(1)
DK, NA	(2)	(2)	(1)	-	-

12. 母親に対する評定：大正生れは「妻」、母親」「主婦」および「社会人」のいずれに対して最高の評定をしていた。逆に低い評定をつけたのは、「社会人」で昭和1桁生れ、「妻」は戦後世代であった。

4つの評定対象のうちで、世代にあまり関係なく評定されていたのは「母親」(7.6~8.4)で、「社会人」は6.9~7.9で全般に低かった。ここで大正生れが最高点をつけていたことは興味深い。

表Ⅲ・12 母親に対する評定
(1点から10点の評定の平均値)

	1919 ~1925	1926 ~1934	1935 ~1945	1946 ~1952	1953 ~1960
a. 妻として	8.8	7.4	7.4	6.9	7.4
b. 母親として	8.4	7.7	7.8	7.6	7.8
c. 主婦として	8.5	8.0	7.6	7.1	7.5
d. 社会人として	7.9	6.9	7.2	7.5	7.2

13. 自己に対する評定：自己評定では、いずれの評定においても、戦無世代が最高、昭和1桁生れは最低であり、世代差が見られた。すなわち戦無世代は高度経済成長期に生れ、育ち、忍耐を知らず、甘えの激しい世代であるのに対して、昭和1桁生れは前にも述べたように戦時下で青春を過し、我慢の世代

であり、このような差が自己評価にも現われたと思われる。また4つの評定対象のうちでは「母親」が最高で、母親としての自己に自信をもっているようである。

表Ⅲ・13 自己に対する評定
(1点から10点の評定の平均値)

	1919 ~1925	1926 ~1934	1935 ~1945	1946 ~1952	1953 ~1960
a. 妻として	7.7	6.6	6.5	6.9	8.2
b. 母親として	8.2	7.1	6.7	6.8	8.5
c. 主婦として	7.5	7.0	6.6	6.7	7.9
d. 社会人として	7.9	6.5	6.4	6.9	8.1

14. 父親に対する評定：いずれの評定でも戦無世代が他の世代に比してかなり高く、娘の父親に対する甘さを感じさせる。また、3つの評定対象のうちでは、「職業人」の評定が高く、働く夫または父親の大変さが評定に現われたものと考えられる。これは理想の役割として、「職業人」が他の役割に比して少なくしか選ばれていなかったことと関係する。

表Ⅲ・14 父親に対する評定
(A：1点～5点の評定の平均値)

	1919 ~1925	1926 ~1934	1935 ~1945	1946 ~1952	1953 ~1960
A { 夫として	3.9	3.8	3.8	3.9	4.5
父親として	3.7	3.7	3.7	3.9	4.5
職業人として	4.2	4.4	4.3	4.3	4.4
B { 理想の役割	50 (9)	40 (24)	29 (27)	39 (27)	14 (11)
夫	11 (2)	33 (20)	32 (29)	26 (18)	10 (8)
父親	28 (5)	22 (13)	23 (21)	26 (18)	5 (4)
職業人	(2)	(3)	(15)	(6)	(55)
DK, NA					

15. 娘に期待するキャリア・パターン：最も多かったのは「結婚退職」で、大正生れは50%，昭和1桁生れは9%，再び戦後、戦無世代で増加していた。次いで多かったのは「一生仕事を継続」で、最多は大正生れ(22%)，最少は昭和1桁生れ(13%)で、その差は約10%あった。戦後、戦無世代がまったく選んでいないのは「就職せず結婚」であり、「女性が働く」という意識は若い世代は定着

したようである。そしてこの項目は世代と負の関連がみられた。

結婚しても子どもが生まれるまでは、家事がそれほどあるわけではなく、功利的に考えると、「結婚退職」も「出産退職」もあまり変わらないと思われるが、女性にとっては功利以外の要因が結婚に関係している。

表Ⅲ・15 娘に期待する職経歴

	1919 ~1925	1926 ~1934	1935 ~1945	1946 ~1952	1953 ~1960
a. 就職せずに結婚する	6 (1)	5 (3)	3 (3)	—	—
b. 結婚まで仕事をする	50 (9)	28 (17)	19 (18)	20 (14)	21 (17)
c. 出産まで仕事をする	—	17 (10)	12 (11)	10 (7)	16 (13)
d. 結婚・出産後も仕事を続ける	22 (4)	13 (8)	16 (15)	14 (10)	14 (11)
e. 結婚後は家でできる仕事(農業も)を持つ	6 (1)	10 (6)	12 (11)	17 (12)	4 (3)
f. 結婚後はパートの仕事をする	—	—	2 (2)	2 (1)	2 (1)
g. 末手に手がからなくなったら再就職する	—	13 (8)	4 (4)	7 (5)	5 (4)
h. その他	—	3 (2)	4 (4)	4 (3)	4 (3)
i. とくに考えていない	6 (1)	3 (2)	11 (10)	14 (10)	15 (12)
DK, NA	(2)	(4)	(15)	(7)	(16)

16. 生き甲斐としての趣味・特技：「特になし」が30～50%にもなっていたことは、女性の生き甲斐のなさを示している。第2位では戦無世代は「音楽」を、大正生れは「お茶・お花」を、他の世代は実用的な「洋裁・手芸」を挙げていた。

表Ⅲ・16 生きがいとしての趣味特技

	1919 ~1925	1926 ~1934	1935 ~1945	1946 ~1952	1953 ~1960
a. お茶・お花	17 (3)	12 (7)	9 (8)	12 (8)	1 (1)
b. 洋裁・手芸	6 (1)	22 (13)	19 (18)	25 (17)	13 (10)
c. 料理	6 (1)	3 (2)	1 (1)	1 (1)	—
d. 音楽	6 (1)	3 (2)	10 (9)	7 (5)	24 (19)
e. 文芸	6 (1)	5 (3)	2 (2)	4 (3)	4 (3)
f. 書道・絵画	6 (1)	5 (3)	4 (4)	4 (3)	9 (7)
g. スポーツ	6 (1)	3 (2)	3 (3)	3 (2)	13 (10)
h. その他	—	7 (4)	1 (1)	—	3 (2)
i. とくになし	50 (9)	38 (23)	47 (44)	41 (28)	30 (24)
DK, NA	(0)	(1)	(3)	(2)	(4)

17. 身につけた時期：「学校時代」「独身時代」が最多であることはどの世代でも見られたが、「子どもに手がからなくなっ

ら」は戦後世代から次第に増加していき、現代の子育ての終了時期と対応している。

表Ⅲ・17 身につけた時期

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 学校時代	17 (3)	13 (8)	12 (11)	20 (14)	60 (48)
b. 独身時期	22 (4)	30 (18)	18 (17)	20 (14)	4 (3)
c. 結婚し、子どもがいない時期	—	—	2 (2)	4 (3)	—
d. 子育て期	—	—	10 (9)	6 (4)	—
e. 子どもに手がかけられなくなってから	6 (1)	17 (10)	11 (10)	3 (2)	—
f. その他	6 (1)	—	—	3 (2)	1 (1)
DK, NA	(9)	(24)	(44)	(30)	(28)

18. 学習意欲：「かなり強い」は世代が若くなるほど多く選ばれて、「非常に強い」は昭和1桁生れ（23%）以外の世代は30%台で差はみられなかった。「あまりない」は戦後、戦無世代では一人も選んでいなかったが、それ以前の世代では5%前後であった。

表Ⅲ・18 学習意欲

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 非常に強い	39 (7)	23 (14)	33 (31)	36 (25)	36 (29)
b. かなり強い	33 (6)	35 (21)	35 (33)	42 (29)	51 (41)
c. 少しはある	17 (3)	35 (21)	27 (25)	20 (14)	12 (9)
d. あまりない	6 (1)	7 (4)	3 (3)	—	—
DK, NA	(1)	—	(1)	(1)	(1)

19. 学習理由：最も多かったのは、大正生れが「学ぶことが楽しい」、昭和1桁生れが「一生学ぶべき」、他の世代が「何かの役に立てたい」であった。「何かの役に立てたい」は世代が若くなるほど多く選ばれていた。

表Ⅲ・19 学習の理由

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 学ぶことが楽しいから	33 (6)	27 (16)	25 (23)	30 (21)	13 (10)
b. 人は一生学ぶべきだから	28 (5)	32 (19)	26 (24)	23 (16)	31 (25)
c. 何かの役に立てたいから	28 (5)	30 (18)	38 (35)	39 (27)	48 (38)
d. その他	—	3 (2)	4 (4)	3 (2)	8 (6)
DK, NA	(2)	(5)	(7)	(3)	(1)

20. 老後の生活：「子どもに世話してもらいたい」と「最後まで自分で何とかしたい」

という2項目が相反する傾向を示した。すなわち世代が若くなるにつれて、前者は減少し（67%→38%）、後者は増加した（22%→45%）。これは家族主義から個人主義へという時代の意識の変遷を明確に示している。「老人ホームなど公的機関を利用する」は大正生れで皆無、昭和2桁生れから10%以上となっていたが、公的機関の認識の不足がうかがわれる。

表Ⅲ・20 老後の生活

	1919 ～1925	1926 ～1934	1935 ～1945	1946 ～1952	1953 ～1960
a. 子どもに世話してもらいたい	67 (12)	62 (37)	54 (50)	41 (28)	38 (30)
b. 最後まで自分でなんとかする	22 (4)	25 (15)	28 (26)	38 (26)	45 (36)
c. 老人ホームなど公的機関を利用する	—	5 (3)	14 (13)	14 (10)	11 (9)
d. その他	—	5 (3)	1 (1)	7 (5)	4 (3)
DK, NA	(2)	(2)	(3)	(0)	(2)

21. 女に生れて：どの世代でも「良かった」と思う人が過半数を占めた。最多は戦後世代の83%，最少は大正生れの67%であった。他の世代は71.2%であった。これは5年前のわれわれの調査と比べると、やや多くなっていた。

22. 生れ変わるとしたら：「女」が良いと回答した人は、全ての世代でも50%以上で、最多が昭和1桁生れの62%で、最少が大正生れの50%で、昭和1桁生れから世代が若くなるにつれて59%，58%，54%である。これは5年前とほぼ一致した結果であった。

前項目との関係をみると、「女に生れて良く、今度も女」と思った人が回答者の65%もあり、「女→男」「男→男」15.6%、「男→女」は4%であった。その理由としては「女→女」では「男は楽しみが多いが、責任が重い。女はあまり楽しみがないが、責任がなく楽である」、「女→男」では「女も良いが、今度は男としてやってみたい」、「男→男」では「自由にやりたいことをしたい」などが挙げられていた。

尚、本研究の調査項目作製に関して、野島正也講師の協力があったことを記して感謝します。また本研究の一部は文部省科学研究費の補助を受けた。

引用文献

- 青井和夫他（1974）生活構造の理論 有斐閣
福井とみ子他（1976）女性の生活史に関する
研究Ⅱ(4) 子どもの価値観
日本教育心理学会第18回総
会論文集
本田時雄（1975）女子大の学生とその母親の
意識(1) 日本教育心理学会
第17回総会論文集
本田時雄他（1976）女性の生活史に関する研
究Ⅱ(6) 母・娘のペアの比
較 日本教育心理学会第18
回総会論文集
本田時雄他（1977）女性の生活史に関する研
究Ⅲ(3) 4つの要因を中心
として 日本教育心理学会
第19回総会論文集
本田時雄他（1978）女性の生活史に関する研
究Ⅳ(2) 世代を中心とした
まとめ 日本教育心理学会

第20回総会論文集

- 本田時雄（1978）生活史によるパーソナリテ
ィ研究の試み 日本心理学
会第42回大会論文集
本田・野島（1980）「現代社会の人間形成」
福村出版
伊藤裕子他（1977）女性の生活史に関する研
究Ⅲ(2) 自己の生活歴とそ
の評価 日本教育心理学会
第19回総会論文集
川浦康至他（1976）女性の生活史に関する研
究Ⅱ(3) 恋愛と結婚 日本
教育心理学会第18回総会論
文集
Schaie, K. W. (1965) A general model for
the developmental
problem. psychol. Bull
64. 92-107.
田代俊子他（1975）女性の生活史に関する研
究Ⅰ 目的と方法 日本教育
心理学会第17回総会論文集
森岡靖美編（1979）現代家族のライフサイフ
ル 培風館
(1980年9月26日受付)